

蜂起への招待

70年安保闘争の総括とその視点

主催：学生会中央執行委員会

70年安保闘争は決定的に闘われないまま その敗北的過程を経過しつつある。日本新左翼が60年安保闘争の痛苦な教訓のなかから築き上げてきたはずである革命的共産主義運動が何故、又敗北せざるを得なかったのであろうか。10・8 羽田以降の暴力闘争と国際主義の旗は一体どこに行ったのか。

60年安保闘争なら、又吉本隆明の眠れる季節への招待や、谷川雁の組織なき組織論や、反パルタイ主義が流行するかもしれない。しかし、今我々は70年にいるのだ。60年とは違って70年代は帝国主義の市場分割による危機の時代だなどと言っているのではない。又、イデオロギーの根源的問題、思想的営為自身の無価値を言うのでもない。我々は少なくとも60年代情況とは自から区別した地点に居る。なぜなら10・8 羽田以降の闘いは革命を萌芽として内在されていたし、革命を限りなく接近させた事を確認するからである。立場はここにある。

にもかかわらず革命が接近すればする程、我々の運動と組織が解体していった事、この事に答ええない限り一切が存在しないのだ。この問題に答えねばならない。

10・8 羽田闘争を契機に発現された暴力革命と国際主義の内実を継承発展させる仕方、その立脚点をイデオロギー的に解明し、現実的普遍を獲得する、この事をなくしては元の木阿弥だ。1871年パリコミューンの全面敗北を契機に学究生活に入らざるを得ないマルクスを受けとめたとき、革命の綱領、党の形成への端初に至る。

現在、後退も前進もしない、かといって前線で闘いもない状態で階級闘争が風化し、空洞化している。70年安保闘争は勝利だ、それに至る全過程も勝利だなどと宣伝する部分は、70年安保闘争から何も学べない輩であろう。我々は一刻の猶予もなく、革命の問題を実践的立場に於いて実現する事に着手する必要がある。

すでに国際的階級闘争は60年後半の挫折の中で、革命主体の建設を実現し再度帝国主義に挑戦しようとしている。日本も例外ではない。ベトナム、インドシナ人民の革命的闘いは、我々が何をしているときでも、戦争し帝国主義と対峙している。日本では入管法による排外主義イデオロギーの確立と在日朝鮮人に対する暴行一リンチ、権力の反革命抑圧支配の攻撃は横行し、72年沖縄返還による自衛隊派兵等、日本帝国主義の国際政治に対する本格的登場、侵略一反革命によるアジア人民の抑圧等、全世界プロレタリアート人民への挑戦は歴史未曾有の戦争一核による地球の消滅を意味している。全宇宙史的必然性が人間をして主体的たらしめるのか。自然発生的成生—発展—消滅の過程を歩ましめるのか。我々は、それは人間が自然を獲得するのか、自然が人間を押しつぶすのかの岐路になっている事を確認しよう。

蜂起への招待とはこうした歴史的時代における我々が歴史的主体として新たな我々の歴史の創造に向けて、武装蜂起するのか、しないのかの問題に限りなく接近する過程でありながら、革命とは何か、党とは、政治とは、人類解放とは何か。およそ人類—自己解放と連関のある全領域を問いつめていく事として確認されなければならない。